

釣りに釣られて

高原英夫

第十二回 「陸奥湾船釣りチャンピオンシップ」

今からもう十年以上も前、平成九年のことだ。私はカレイ釣りにはまり切っていた。三月の末ともなるともう船を出し、たいして釣果は期待できないのだが、要するに待ちきれないでいるのだ。投げ釣りをしていた時分でも、やはり三月にはもう出かけて夏泊半島でいい型をあげたりもしていた。

会社の仕事の話である。私は展覧会とかイベントをやる部に籍をおいていた。

孔子曰く

「これを知る者は　これを好むものに如ず、これを好む者は　これを楽しむものに如かず」である。

地図で青森県をながめていると、陸奥湾はどう考えても大きな湖にしか見えない。同じような湾は日本では鹿児島島の志布志湾がある。

つまり釣り好きが高じて、これを仕事にしてみようと思ったのである。これを読む人の中には、私も参加申し込みをしたという方もかなりいると思う。二十代の頃、

転勤で八戸に住んだこともあり、階上のあたりから船も出したし、岸壁で投げ釣りもしたのだが、太平洋と陸奥湾ではどうも様子が違うことは、青森で釣り始めてすぐわかった。

まず波の大きさだ。八戸でソイ釣りをした時など、ほんの少し離れた先の船が、波の上下で、見えたり隠れたりする。テトラに上って投げ釣りしようにも波がデカすぎて、一度海に落ちたら、つかまりどころがなく絶対助からないという気になる。ある時、船での釣りの帰り船頭さんがオレンジ色の浮玉を海に落としたことがあった。それを拾おうと、船をあちらこちらに回しながら探したが、結局見失いあきらめたことがあった。浮玉といっても相当大きい。以後人間ごとき小さな、しかも黒い頭がやつとこさと浮んでいるようでは、とてもじゃないが助けてもらえないと固く心に刻んだ。

そこで、天候にさほど左右されない陸奥湾で、主にカレイ、アブラメの釣り大会ができないものかと考えた。もちろん、横浜町、脇野沢村、平館などではすでに釣り大会は行われていることは知っていたし、実際、平館の大会には参加もしてみた。

六ヶ所村での大会にも参加してみたが大会は風で大波のため中止となり、抽選会となつて鮭を当てて帰つてきたこともあつた。

大会は、ある日を定め陸奥湾一斉にやるのだ。できるのは陸奥湾しかないと思つた。幸い私は会社の釣りクラブに入つていて、会員は総勢三十人を超えていた。みな釣り好きなことはいうまでもない。みんなに計量、連絡係になつてもらい、自分達も湾内の各所から船を出し、決められた時間に、決められた計量所に行き、その釣果をファックスで本部に送る。計量所は何ヶ所がいいだろう。脇野沢、むつ市、横浜町、野辺地、平内、青森市、蟹田、今別の八ヶ所にしよう。そういえばその頃から釣り人は、おにぎりをコンビニで買うようになつたり、集合場所をやはりどこそこのコンビニでというようになっていた。

そこでコンビニの本部に勤めるWさんと横浜町へカレイ釣りに行つた帰り、車の中でこの構想をずうつと青森まで語り続けた。つまり計量所をそのコンビニでやるのだ。快く協力を承諾してくれた。順位は、ファックスからコンビニユータに打ち換え即座に計算できるようにした。また携帯電話が普及しだしたところでどこにしよう

が連絡に事欠くようなことはなくなっていた。協賛社に景品集めのため仙台の釣り具メーカーの営業所にも足を運んだ。いまは閉めてしまったが「太公堂」の社長さんとも随分話し合いをした。青森でしかやれない、これはそういうイベントで、私にしか考えつかないものだ。ゞこれを楽しむ者に如かずゞだ。

ところで県内の各漁協では沖止めといつていわば定休日を設定する。今はどうかわからないが、当時、正月年明けとともに、何月何日と各漁協ごとに決めていた。一月中には湾内の漁協に電話をし、沖止めの日を確認し、開催の日を定めた。やはりカレイがばんばんくる時期がいい。そしてどこの沖止めともぶつからない日。それは平成九年の五月三十一日と決めた。

新聞に社告を出し、応募要項の広告を出して、思いもよらなかったほどの多くの応募があった。それが各漁協で、または自分のボートでと海に出るのだから、船一艘に八人乗れるとしても百艘を越える船がこの大会にと出船することとなる。

ところで、私はといえば、大会の成立、不成立を決めたり、問い合わせに答えるために本部にいることになる。問い合わせといつても、例えば十和田から出発して

横浜町から船を出したい場合、深夜に家を出ることとなる。よつて、社の二人と本部に徹夜で詰めることにした。前日には浪打にある地方気象台に行き、予報官に会い、実際、モニター画面の前でいろいろ説明を受けた。また新聞社のやる事でもあり、万が一にも生命をおびやかすことがあつてはならないと、海上保安部にも出掛け、注意報、警報などがどんな風の強さのレベルから発せられるかを聞いた。要はどんな注意報でもひとつでも出れば、大会は成立しないこととした。陸奥湾でヤマセの時は、蟹田では大変でも横浜ではなんとかできる。その逆もわかりだ。太平洋では絶対考えられないことなのだが、私自身も注意報が出ていても出漁した経験は何度かある。ただ何度もいうが、新聞社のイベントとしてはそれはダメだということなのである。

ついにその日はきた。社のS君とT君と私は本部へ詰めた。夕方には一度気象台へも行った。ところがどうも天候がはつきりしない。やれそうな、ダメそうな、そんな答えしか出てこない。夕方になり波浪注意報が出て消えない。そしてそのまま夜を迎えた。

深夜、自動的に大会の不成立が決まった。天気予報をラジオでも聞いていればわかるのだが、必ず問い合わせはある。私は同時に青森放送のラジオ局の方にお願いで、中止になった旨の放送をもらうことにしていた。ファックスで原稿を送り、中止の放送をもらった。思い通りにはいかないものである。ただ、携帯で鶏沢や野辺地、脇野沢で釣っている仲間からは連絡が入って、釣りをしているとのことだった。鶏沢では五十センチを超える石ガレイが出たという。成立していればトップ賞だったろう。

夕方になり各方面から帰ってきて、わざわざ本部まで寄ってくれた仲間がいた。カレイをもらった。私は、S君とT君にそのまま渡し、持って帰ってもらった。

参加者へ用意したりール、竿などの景品は、後日抽選をし当選者に送った。中止としても延期できる大会ではない。でも仕方のない事だった。

気持ちを切り替え、翌年もとりかかった。結果は、天候はまたほとんど同じ状態となり、またもや成立しなかった。だからこの文章を書いていると、ふたつの大会が頭の中で混じり合いひとつの事となってしまうている。でも思い出深い仕事だっ

た。成立していればまたこれはどんなによかったか。

三度目とは思ったが、三度目の正直なのか、二度あることは三度あるのか、結局はやらないことにした。いくらなんでもどんなに好きな連中とはいえその労力を強いる事に気が引けたのである。

今でも、できるものと考えている。それで、ラジオの生番組で、あつちの船では今、何十センチの大きいのがあがつたとかの放送を聞きながら過ごす。

天候に対し厳格すぎたとは思わないが、つくづく私は天気についていなかった。誰かまたやってくれないものかと、今でも思う。

陸奥湾はゆつたりとして、それを待っているのだと思う。

平成23年5月